

# 誌上KELESセミナー

毎年3回行われているKELESセミナーで講師を務めていただいた先生に、誌上でもセミナー・ワークショップを行っていただきました。英語教育のhot issuesについて、分かりやすく論じていただきます！

## 語彙学習方略 —理論と実践—

水本 篤 関西大学

### 1. はじめに

学習方略 (learning strategies) は、外国語教育の分野では 1975 年に初めて論文が発表され、過去 40 年以上にわたって研究が進められてきた。ともすれば、教師側のみ視点や、認知的な仕組みに焦点を当てることが多い外国語教育研究の中で、学習方略研究は学習者の視座に立った、非常に実践に近い分野であるといえる。

その中でも、語彙学習方略 (vocabulary learning strategies: VLS) は、多くの研究者・実践者の関心を惹きつけるものである。なぜなら、語彙学習は、結局は学習者が主体的に行わなければならないものであり、学習者がそこでどのような工夫をしているかを明らかにし、その方法を他の学習者にも伝えることが、学習をサポートするために有効であると考えられるからである。

本稿では、はじめに近年の方略研究における学習方略の定義を概観する。次に、語彙学習方略の分類と種類を紹介し、語彙学習方略指導について、これまでの研究で明らかになっていることを紹介する。最後に、語彙学習方略研究の展望をまとめる。

### 2. 学習方略の定義

1975 年に始まった外国語教育研究分野における学習方略研究は、1990 年代にピークを迎え (O'Malley & Chamot, 1990; Oxford, 1990)、第二言語習得の分野でも一つの研究領域として確立したものになっている (e.g., Loewen & Reinders, 2011)。学習方略研究は学習成功者 (Good Language Learner) の研究として始められたが、研究が進むにつれて、学習成功者の用いている方略のみを規範的に記述するのではなく、「学習成功者となるには様々な方法がある」(Cohen & Weaver, 2005; 竹内,

2003) ということが明らかになったため、学習方略の定義もそれに合わせて変化していった。近年では、学習方略を包括する概念である自己調整学習 (self-regulated learning) の枠組みも加わり (Dörnyei, 2005)、Oxford (2017) では以下のように定義されている。

L2 learning strategies are complex, dynamic thoughts and actions, selected and used by learners with some degree of consciousness in specific contexts in order to regulate multiple aspects of themselves (such as cognitive, emotional, and social) for the purpose of (a) accomplishing language tasks; (b) improving language performance or use; and/or (c) enhancing long-term proficiency (p. 48).

図 1 は、近年の外国語教育分野における学習方略研究で議論、提案されている学習方略と関連概念の関係をまとめたものである (包括的な方略の定義は Oxford, 2017 を参照のこと)。図の上部には、方略の選択・使用を潜在的に行う能力である、自己調整能力 (self-regulatory capacity) とメタ認知的知識 (metacognitive knowledge) がある。これらは特性的 (trait) であるため、質問紙調査で高い値を示している学習者は、その能力が高いことを示す。つまり、これらの特性を測定する場合、その質問紙は心理尺度としてより信頼性・妥当性の高いものとなり得る (Dörnyei, 2005)。

一方、方略の選択・使用 (図 1 下部) は、自己調整能力とメタ認知的知識によって引き起こされる実際の思考や行動であり、状況的 (state) なものである。学習者は個人差要因 (individual differences)、学習内容 (task)、置かれた学習環境 (context) に応じて、メタ認知方略、認知方略、情意方略、社会的方略のよ

うな数ある方略の中から自分に合ったものを意図的に選択・使用していく。方略は順番に (chains)、組み合わせて (clusters)、そして、それらを体系的に使用する (orchestration)。そのため、ある一つの方略をより多く使用するということが重要というわけではなく、いかに体系的に使用するかということが方略の要諦となる。つまり、頻度よりも「いかに上手く方略を使っているか」という点 (How often < How well) に着目すべきであり、個人の方略使用を明らかにする目的の場合には、質問紙調査で量的に捉えることは、方略の本質に反するため、質的なアプローチや量と質を組み合わせた混合研究法 (mixed methods research) が主流となる (Griffiths & Oxford, 2014)。

### 3. 語彙学習方略の分類

語彙学習方略 (VLS) 研究は学習方略と、語彙習得の2つが組み合わさった研究である。語彙習得研究が「語彙習得の仕組み」(learning) を対象としているのに対し、VLS 研究は「学習者がどのように語彙学習を行っているのか」(learner) に焦点を当てている。図2は初期の代表的な VLS 研究である、Gu and Johnson (1996)、および Schmitt (1997) を基に作成した VLS の分類である (Mizumoto, 2010)。まず、学習者は、ある語彙に出会ったときに、その意味を知るために、推測 (guessing)、辞書使用 (dictionary)、クラスメートや教師に意味を確認する (social) などの意味発見方略 (discovery strategies) を使用する。

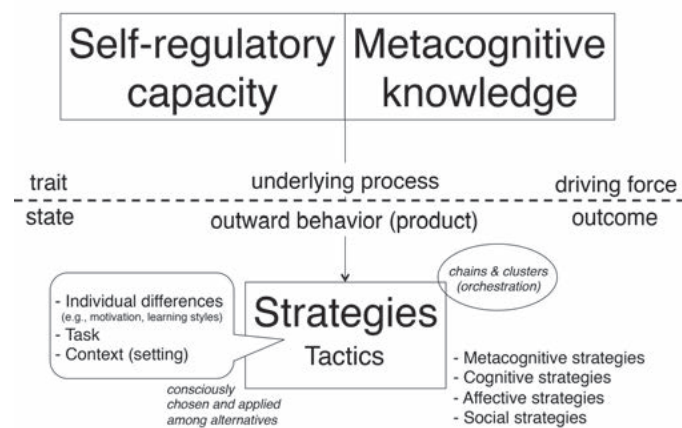


図1. 学習方略と関連する概念の関係

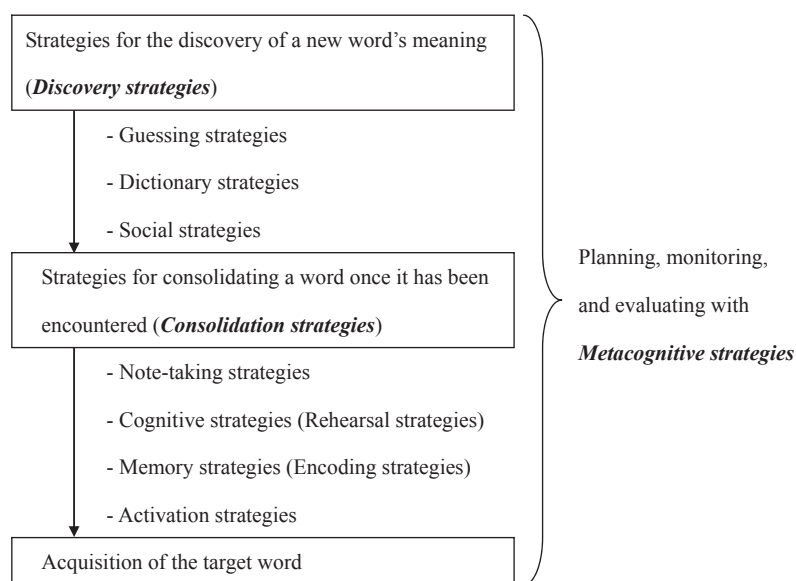


図2. 語彙学習方略 (VLS) の分類 (Mizumoto, 2010, p. 15)

次に、語彙を定着させるために、ノートやカードに記入したり (note-taking)、聞く、書く、言うなどの反復を行う (cognitive/rehearsal)。さらに深い処理を行うために (memory/encoding)、イメージ化、関連付け、接辞の利用などの体制化を行う (e.g., 前田・田頭・三浦, 2003)。そして、実際にその語彙を使うこと (activation) により習得につなげていく。また、(どの語彙をどういうソースからインプットしていくかという点を含んだ) すべての方略使用を計画し、モニタリングし、うまく方略が使用できているかを振り返るためのメタ認知方略 (metacognitive strategies) によって、全体的な方略使用を連動させていく。

これまでの VLS 研究で得られているいくつかの知見は次のようなものである (紙幅の関係上、詳細や関連文献は Mizumoto, 2010 を参照のこと)。

- 語彙学習の成功者は幅広い VLS を選択し、組み合わせながら使用している。
- 語彙学習の成功者は語彙学習に関して構造化された方法を用いている。
- VLS を意識的に使用している学習者は習熟度も高い。
- 初級レベル学習者は単純な反復、上級レベル学習者はより深い精緻化された VLS 方略を使用するという傾向がある。
- 全体的に反復方略が多く、イメージ化や連想、関連付けは使用が少ない。
- 習熟度や年齢、性別によって VLS の使用は異なる。
- VLS の使用は学習環境、文化のような要因の影響も受ける。

その他にも、「推測 (guessing) は良い読解方略であるが、語彙の定着には十分ではないため、辞書などで推測を確認する必要がある」、「協働学習も語彙習得に役立つ」、「カードを作ることが VLS ではなく、実際に使って復習することが VLS である」、「語彙を繰り返し書くだけでは効果がなく、音声も利用する必要がある」、「記憶術 (mnemonics) やイメージ化や連想、関連付けの VLS は効果的であるのは事実ではあるが、活用範囲が限られている」、「復習

の間隔を工夫することで記憶の長期的な保持が促進される」(Nakata, 2015)、「ICT を活用することで、効果的な方略の使用を支援することができる」(Nakata & Webb, 2016) など、語彙習得研究の知見と合わせると、VLS 研究は多くの実践的なアドバイスを提供してくれることがわかるだろう。

#### 4. 語彙学習方略指導

学習方略研究はその始まりから、方略指導の可能性を視野に入れた分野である。そのため、VLS 指導についても、これまでに多くの研究が行われてきている。語彙学習には必然的に語彙を記憶することが含まれるため、初期の VLS 指導研究では反復、イメージ化、体制化などの指導が中心であったが、近年では、VLS 指導はメタ認知方略と認知方略を組み合わせたものを明示的に指導するほうが効果的であると報告されている (Mizumoto & Takeuchi, 2009)。

Nation (2008) は語彙指導を考えた場合、直接的な語彙指導の優先順位は低く、「語彙指導を計画する (planning)」「方略指導を行う (strategy training)」「語彙のテストを行う (testing vocabulary)」「語彙を指導する (teaching vocabulary)」という順番の重要度になると主張している。これは、学習者が知らなければならない語彙数に対して、教師が直接教えることができる語彙数が限られているからであり (もちろん、教えた語彙が必ずしも定着するわけではない)、計画、方略指導、テストの優先度を高めるほうが、実りが多いためである。

では、授業に VLS 指導を取り入れるにはどうすれば良いだろうか。特に、研究の一環として VLS 指導を行う場合には、学習方略指導の理論的枠組みが必要になるため、(1) Preparation、(2) Presentation、(3) Practice、(4) Evaluation、(5) Expansion の順に明示的に方略指導を行う The Cognitive Academic Language Learning Approach (CALLA) (Chamot, 2009) のようなモデルに準拠すべきであるが、そうでない場合は、すでに行なっている授業形態の中に組み込む形でも良いだろう。

実際に教える VLS は、多くの方略を一度に教えてしまうと、学習者が混乱し、うまく使えないということがある。そのため、(1) すでに使っている馴染みのあるもの、(2) 学習者が知っておくべきであると思われるもの、(3) 学習者のニーズに合っているもの、(4) 指導の内容・目的に合っているものという観点を踏まえつつ、教師が選択していくことになる。Nation (2008) は、(1) 文脈からの推測、(2) カードをうまく使う、(3) 接辞を学ぶ、(4) 辞書使用の 4 つを教師が教えるべき方略として挙げている。これは、授業外で学習者が自律的に語彙を学んでいく場合に必要の方略を教えることに重きを置いているためである。ただし、単語帳を渡してテストをするというようなことを行なっている場合には、「どうやって語彙の学習をすればよいかわからない」、「自分にあった方法はどのようなものかわからない」という、よく聞かれる学習者の声を考えると、明示的にワークショップのような形で、どのような VLS があり、どうやって自分に合ったものを選んでいくかを指導することも必要であることがわかる。

学習者は教師が有効だと考える方略を使用するとは限らない (吉田・村山, 2013)。これは、学習者の方略に対する好み、有効性、コストへの認識なども、方略の選択・使用に影響を及ぼすことからである (竹内, 2001)、そのため、指導をした VLS を学習者が使用しないということも十分考えられる。しかし、VLS 指導の目的は、すでに使っている方略や、その学習者が使わない方略であったとしても、どういう場で、どのような目的で、その方略を使用するかということを明示的に指導し、VLS に対する意識を高め、その有効性に対する誤った思い込みを変えることにあるため、VLS 指導は無駄にはならない。

方略指導の重要性を説く場合に、よく引用される諺として、“Give a man a fish and he eats for a day. Teach him how to fish and he eats for a lifetime.” というものがある。熱心な英語教師に巡り合っ、指導してもらったことができた幸運な学習者も、ずっとその教師に英語を教えられるわけではない。それを考えると、学習者が自律的な語彙学習を継続し

ていけることができるように、その手段となる VLS の指導を取り込んでいく価値は十分にある。

## 5. 今後の展望

外国語教育分野における方略研究は 40 年を越える歴史を持ち、VLS 研究もこれまで数多く行われてきた。理論面では、自己調整学習の枠組みを取り入れた研究も増えているが (e.g., Mizumoto, 2013)、VLS の分類や、質問紙調査で VLS 使用の頻度を報告するだけの研究は、それほど意義が見いだせないほどに成熟してきた。学習方略は、誰にでも教えれば英語学習が上達する秘技のようなものではなく、それぞれの学習者がそれぞれの置かれた環境で、タスクやニーズ、そして個人差要因に応じて、学習効果を最大限にできるように意図的に工夫して行う方法のことである。VLS についても同じことが言えるため (Gu, 2003)、実践面での応用 (VLS 指導) がもっとも重要な課題である。

語彙研究の大家 Paul Meara は、ある VLS 研究の書評 (2009) の一部に、「(語彙) 学習方略研究はなぜか面白みに欠ける」というコメントを述べ、その理由を以下のように考察している。

Puzzling over why I have such a negative reaction to strategy research, even when it is well-carried out, as is the case here, I eventually realised that what was bothering me was the fact that all this work focuses on the strategies used by learners rather than on the learners who use the strategies. One of the striking features of the strategy research is that it almost always hints that there is a huge amount of variation in the way learners use strategies. The composite picture that emerges from the questionnaire data does not always reflect the very large range of individual differences that operate in this area, and makes the overall picture difficult to interpret. The “typical” results, for example, are often not really typical at all, just the average of a lot of very diverse responses. All too often the



voices of individual learners tend to get lost in a mass of aggregated data. (p. 546)

後半部分の考察は方略研究の専門家たちも、以前から主張していることであり、個人の状況的な方略使用 (situated strategy use) を方略研究では対象にすべきである (e.g., Takeuchi, Griffiths, & Coyle, 2007)。また、質問紙を使った量的なアプローチを織り交ぜる場合にも、個人の方略使用をあぶり出すような、複雑な現実在即したものをを用いる必要がある (Mizumoto & Takeuchi, in press)。

VLS 指導研究の場合には、VLS の指導によって、特定の個人差要因を持った学習者が、自分が置かれた学習環境や取り組むべきタスクに応じて、どのようにダイナミックに変化していくかを丁寧に描写するような研究が今後は求められる。VLS 指導研究は、教室内の教師による明示的なものだけでなく、VLS 指導を補完する ICT 利用 (Ranalli, 2009) や、e ポートフォリオによる語彙学習の支援 (Tanaka, Yonesaka, & Ueno, 2015) のような研究も進んでおり、「語彙学習方略の意識的な使用や指導は効果がある」という一般的な記述レベル以上のものが、今後の研究や実践では明らかになってくるであろう。

## 引用文献

- Chamot, A. U. (2009). *The CALLA handbook: Implementing the cognitive academic language learning approach* (2nd ed.). White Plains, NY: Longman.
- Cohen, A. D., & Weaver, S. J. (2005). *Styles and strategies-based instruction: A teachers' guide*. Minneapolis, MN: Center for Advanced Research on Language Acquisition, University of Minnesota.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Griffiths, C., & Oxford, R. L. (2014). The twenty-first century landscape of language learning strategies: Introduction to this special issue. *System*, 43, 1–10. doi:10.1016/j.system.2013.12.009
- Gu, Y. (2003). Fine brush and freehand: The vocabulary-learning art of two successful Chinese EFL learners. *TESOL Quarterly*, 37, 73–104. doi:10.2307/3588466
- Gu, Y., & Johnson, R. K. (1996). Vocabulary learning strategies and language learning outcomes. *Language Learning*, 46, 643–679. doi:10.1111/j.1467-1770.1996.tb01355.x
- Loewen, S., & Reinders, H. (2011). *Key concepts in second language acquisition*. Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.
- 前田啓朗・田頭憲二・三浦宏昭 (2003)。「高校生英語学習者の語彙学習方略使用と学習成果」『教育心理学研究』51, 273–280.
- Meara, P. (2009). Book review: Vocabulary learning strategies and foreign language acquisition. *System*, 37, 545–547. doi:10.1016/j.system.2009.05.005
- Mizumoto, A. (2010). *Exploring the art of vocabulary learning strategies: A closer look at Japanese EFL university students*. Tokyo: Kinseido. Retrieved from <http://www.mizumot.com/files/book2010.pdf>
- Mizumoto, A. (2013). Effects of self-regulated vocabulary learning process on self-efficacy. *Innovation in Language Learning and Teaching*, 7, 253–265. doi:10.1080/17501229.2013.836206
- Mizumoto, A., & Takeuchi, O. (2009). Examining the effectiveness of explicit instruction of vocabulary learning strategies with Japanese EFL university students. *Language Teaching Research*, 13, 425–449. doi:10.1177/1362168809341511
- Mizumoto, A., & Takeuchi, O. (in press). Modeling a prototypical use of language learning strategies: Decision tree-based

- methods in multiple contexts. R. L. Oxford & C. M. Amerstorfer (Eds.), *Language learning strategies and individual learner characteristics: Situating strategy use in diverse contexts*. London, England: Bloomsbury.
- Nakata, T. (2015). Effects of expanding and equal spacing on second language vocabulary learning: Does gradually increasing spacing increase vocabulary learning? *Studies in Second Language Acquisition*, 37, 677-711. doi:10.1017/S0272263114000825
- Nakata, T., & Webb, S. A. (2016). Does studying vocabulary in smaller sets increase learning? The effects of part and whole learning on second language vocabulary acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 38, 523-552. doi:10.1017/S0272263115000236
- Nation, P. (2008). *Teaching vocabulary: Strategies and techniques*. New York, NY: Thomson Heinle.
- Oxford, R. L. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York, NY: Newbury House.
- Oxford, R. L. (2017). *Teaching and researching language learning strategies: Self-regulation in context* (2nd ed.). New York, NY: Routledge.
- O'Malley, J. M., & Chamot, A. U. (1990). *Learning strategies in second language acquisition*. Cambridge University Press.
- Ranalli, J. (2009). Prospects for developing L2 students' effective use of vocabulary learning-strategies via web-based training. *CALICO Journal*, 27, 161-186. doi:10.11139/cj.27.1.161-186
- Schmitt, N. (1997). Vocabulary learning strategies. In N. Schmitt, & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy* (pp. 199-227). Cambridge University Press.
- Takeuchi, O., Griffiths, C., & Coyle, D. (2007). Applying strategies to contexts: The role of individual, situational, and group differences. In A. Cohen, & E. Macaro (Eds.), *Language learner strategies: Thirty years of research and practice* (pp. 69-92). Oxford University Press.
- 竹内 理 (2001). 「外国語学習方略の使用に対して「有効性」「コスト」「好み」の認識が与える影響について」『ことばの科学研究』2, 22-33.
- 竹内 理 (2003). 「より良い外国語学習法を求めて—外国語学習成功者の研究」松柏社
- Tanaka, H., Yonesaka, S. M., & Ueno, Y. (2015). An e-portfolio to enhance sustainable vocabulary learning in English. *The EUROCALL Review*, 23, 41-52. doi:10.4995/eurocall.2015.4663
- 吉田寿夫・村山航 (2013). 「なぜ学習者は専門家が学習に有効だと考えている方略を必ずしも使用しないのか」『教育心理学研究』61, 32-43.



水本 篤(みずもと あつし)

関西大学外国語学部・外国語教育学研究科准教授  
専門はコーバスの教育利用、語彙学習方略、言語テストング。

主な著作は『Exploring the art of vocabulary learning strategies: A closer look at Japanese EFL university students』(2010, 金星堂)、『外国語教育研究ハンドブック』(2012, 松柏社, 共編著)、『ICTを活用した英語アカデミック・ライティング指導—支援ツールの開発と実践—』(2017, 金星堂)。

これまでに、学習方略、自己調整学習、Data-driven learning (DDL)、量的研究手法に関する論文が、*Applied Linguistics*, *Innovation in Language Learning and Teaching*, *Language Teaching Research*, *RELC Journal*, *ReCALL*, *Reading in a Foreign Language*, *System*などのジャーナルに掲載されている。

2014年全国英語教育学会(JASELE) 学術奨励賞受賞。2016年英語コーバス学会(JAECS) 奨励賞受賞。